

内気な歌姫

アッシュクフルダー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

内田鈴菜は、幼い頃に母を事故で亡くし、父と二人暮らし。

母と一緒に歌うことが何よりも大好きだった、

鈴菜は、その死をきっかけに歌うことができなくなっていた。曲を作ることだけが生きる糧となっていたある日、

中学時代の親友に誘われ、全世界で数億人以上が集う、インターネット上の仮想世界『U』に参加することに。歌えないはずの鈴菜だったが、「Bellie」と名付け、自然と歌うことができた。

その歌は瞬く間に話題となり、

歌姫として世界中の人気者になっていく。

そして、時は過ぎて：

プロセカ小説シリーズ 第十六弾です。

# 目 次

第一話 歌う夢	1
第二話 一歌とデート	4
第三話 一歌の部屋	7
第四話 鈴菜の一日	10
第五話 内田鈴菜の生い立ち	13
第六話 校外学習の班決め	15
第七話 横浜の校外学習	18
第八話 昼食後の校外学習	21
第九話 水上バスでプロポーズ？	24
第十話 寧々との出会い	27
第十一話 手作りプレゼント	30
第十二話 鈴菜は奏と出会う	34
第十三話 アロマオイルを見よう	37
第十四話 アロマオイルの香り	40
第十五話 アロマキヤンドルを作ろう	43
第十六話 アロマオイルを入れよう	46
第十七話 完成！アロマキヤンドル！	49

## 第一話 歌う夢

私の名前は、内田鈴菜

私立宮益坂女子学園高等部に通う、一年生だ。

高知県の片田舎から、引っ越して来た。

ショートカットが特徴的な15歳の女子高校生。

幼いころに母親を事故で失い、

現在は父親とともに暮らしている。

内向的な性格のために物静かで学校でも目立たない存在であったものの、

あるとき、中学時代の友人からの勧めでインターネット上の仮想空間

『U（ユー）』にアカウントを登録し、『ベル』（Bell）という名前で、

『A s（アズ）』で歌を披露したところ、瞬く間に世界中から称賛を受けて

『U』届指のバーチャルシンガーへと登りつめている。

歌姫『B e l l e（ベル）』として『U（ユー）』の世界で成功を手にした、

鈴菜は、自身にとつて最大規模のライブを開催したことが、あるほどである。

「おはようございます…」

「あっ、おはよう！鈴菜ちゃん！」

「あのっ！私、みのりちゃんのこと！

応援しているよ！」

普段のみのりちゃんもだけど、

アイドルのみのりちゃんも、素敵だよ！」

「ありがとう！鈴菜ちゃん！」

花里みのりちゃんは、私と同じく、

ボーカロイドや、バーチャルシンガーが、

好きな、女の子で、高校入学時から、仲良くしている女の子

「おはよう、鈴菜ちゃん」

「おはよう！小豆沢さん！」

この子は、小豆沢こはねちゃん。

同じクラスで、私の数少ない話題相手でもある。

「鈴菜ちゃん、歌い方のコツとかない？」

「うーん、特にないかな？」

自分でも、歌うことが、得意って訳じやないし、得意というよりは、好き…かな？」

「そなんだね、私も、歌うのは、あんまり、得意じやないけど、好きって気持ちと、練習して、努力すれば、ちゃんと、歌えるのかな？」

「そうだと思うよ？」

「じゃあ、鈴菜ちゃん！」

一緒に歌う練習しない…？」

「私でよければ…」

「じゃあ、私も練習付き合つていいかな？」

「みのりちゃんも、こはねちゃんも！」

三人で、歌の練習をしようつ！

放課後でいいかな？」

「うんっ！」

「楽しみにしているね！」

こうして、鈴菜とみのりとはねの三人で、歌う練習をするのだつた。

「じゃあ、まずは！発声練習ね！」

「三人で交代しながら、得意な歌を歌つてみようよ！」

「それ、いいよ！じゃあ、誰から歌う？」

「わ、私から…」

鈴菜は恥ずかしい表情をしながら、歌い始めた！

透き通った歌声が、みのりとこはねの耳に、

響くのだつた：

「ど、どうかな…？」

「すゞいよ！ 鈴菜ちゃん！ 私より、上手！」

「私よりも、上手いと思う！」

「みのりちゃんも、こはねちゃんも…

そ、そんなこと言われたら…」

「照れちゃつたりして？」

「そ、そんなことないよ！」

「照れている、鈴菜ちゃん、可愛いね」

「私も！ 可愛いよ！」

「だ、だから…や、やめて…」

何がともあれ、歌う練習をするのだつた。

## 第二話 一歌とデート

内田鈴菜には、星乃一歌という、友達がいた。

二人はボーカロイドや、バーチャルシンガーが、好きな所から、意気投合した友達である。

「ねえ、鈴菜、この後、どこかに行かない？」

「ボーカロイドのCDを見に行きたいな」

「私も観に行きたいと、思っていたの！」

「新しい曲、出たって、聞いていて…」

「じゃあ、見に行こうよ！」

「いいの…？行きたい！」

こうして、一歌と鈴菜は、

一緒に、CDショップに向かうことになつた。

CDショップにて

「これかな？」

「うん！それ！すごい、ミクのイラスト、  
キレイだね」

「私、初音ミクちゃんに憧れて、  
歌を歌っているの」

「そうなの？知らなかつた！」

今度、歌、聴いてみたいな！」

「bell eつて、名前で、ネットで歌つてあるんだ、  
歌姫つて、言われているけど、  
ちよつと、恥ずかしいな…」

「bell eつて、あの有名な歌姫？」

「鈴菜だつたの？すごい！近くにいたなんて！」

「すごいって、言われると、照れるよ…」

「だつて、本当にすごいじゃん！」

あの、数万人のも、人々を虜にした、  
あの、歌姫だよ！隣にいて、ちよつと、緊張するかも…」

「そ、そんなことないよ？」

「歌ちゃんの歌つている姿、カツコイイと思ううよ！」

「ありがとう、嬉しいな」

「いつか、一歌ちゃんと歌えたらいいな」

「うん、いつか、歌えたらしいね、

楽しみにしている…って、言つたら、

ちよつと、緊張するけど…」

「私も緊張しているよ？私は歌う事しか、取り柄が無いから…」

「そんなことないよ、鈴菜ちゃんは、

いいところが、いっぱいあるじやん！」

「そ、そうかな…？」

「そうだよ、私は好きよ？」

「ボーカロイドにハマつているんだよ？」

私はボーカロイドや、バーチャルシンガー達が、

きつかけで、歌い始めたんだ」

「私も！初音ミクちゃん、好きなんだ」

「ミクちゃんは、いいよね、

何にでもなれるし、自由に歌えるし、

そこが：いいんだよね…」

「うん、どんな風にもなれる、ミクが、  
ちよつと、羨ましいかも？」

「私も、そう思うよ」

「私も、そんな風に歌いたい！」

「うん、ミクちゃんみたいに、自由に歌いたい！」

「そうだね、あつ、どのCD買う？」

「私は普段、音楽聞く時、CD派なんだよね」

「私も！CDじゃないと、落ち着かないもんね」

「ううん、どのCDも、捨てがたいし…」

「迷っちゃうよね…」

「とりあえず、これにしよう！」

「それじゃあ、私は、これにするね」

こうして、二人で、初音ミクのCDを一枚ずつ、  
購入するのだつた。

「普段は、CDが、カセットで、  
ボーカロイドの音楽を聴いているんだ」

「うなんだね」

「それで、時々、ネットで、  
歌つたりしている」

「それが、上手くは表現できなけれど、

いいなあ～って、思うんだ」

「褒めすぎだよ…」歌ちゃん」

「ごめん！ごめん！つい、羨ましくて…」

「私も、一人で歌つて来たから、

みんなと歌いたいな…って、思つたりするんだね」

「うなんだね」

「いつか、みんなと歌えたらしいのにな」

「私も、そう思うよ」

二人と何気ない、会話が続くのだつた。

### 第三話 一歌の部屋

今日は、一歌ちゃんの家に遊びに行く日。改めて、近くで嗅ぐ、一歌ちゃんの香り、好奇心で冴えた、頭が無意識のうちに、そう考えていたら、一歌ちゃんに案内されて、彼女の部屋にやつて來た。

「わあ！一歌ちゃんの部屋だ！」

「そんなに、面白いものは、無いと思うな」「だ、だつて、一歌ちゃんの部屋だよ！」

「ふふ、なにそれ」

一歌ちゃんは、楽しそうに笑い、  
私まで、笑つた。

「あつ、ジユース持つてくるね！」

「うんっ！待つてるね！」

そう言つて、一歌ちゃんは、部屋から出ていった。  
この部屋には、私一人だけだった。

改めて、部屋を見渡すと、

シンプルな家具や雑貨が、置かれていた。  
一歌ちゃんらしい、部屋だつた。

そこで、私は、あるものに気付く。

それは、一歌ちゃんのギターだつた。

青いギターが目に入つた。

カツコいいギターだなど、私はそう感じるのだつた。

「カツコいいでしよう？おさがりのギターなんだ」

「一歌ちゃん！」「ごめんなさい！勝手に見ちゃつて…」

「ううん、大丈夫だよ、ギター見ていたの？」

「うん、すごくカツコいい！」

私は歌う事しかできないから…」

「鈴菜の歌声はすごいよ、私の演奏や歌より、

ずっと、価値があるんだもん」

「そ、そんなことないよ！」

でも、そう言われると、嬉しい！」

顔を上げて、一歌ちゃんの顔を見ると、控えめな笑顔が、私の瞳に映った。

「あ！一歌ちゃん！この前の、CDありがとう！  
すつづく、良い曲だつたよ！」

「ほんと？よかつたあ…」

「うん、それでね…ちょっとだけ…ワガママ言つていいかな？」

「どうかしたの？」

「一歌ちゃんが、貸してくれた、CD、  
すつづく、一歌ちゃんに合つた曲だと思うんだ！」

「私に？」

「そう、落ち着いていて…何て言えばいいのか、

わからぬいけど…一歌ちゃんみたいな曲だつたな…」

「そんな、曲あつたつけ？私には、わからぬいや…」

「そ、そんなことないよ！」

本当に、直感だつたから！その…もしよかつたらだけど…

私と一緒に歌いませんか？」

「一緒に歌うの？」

「一歌ちゃんが、ギターを弾きながら、  
私と一緒に歌うの！ダメ…かな？」

「うん、いいよ、嬉しいな、そんなこと言つてくれるなんて、  
音色は変わるけど、私のギターで、伴奏が歌えそう」

「ほ、ほんとうに！」

「私、一歌ちゃんと一緒に歌えるの？」

こうして、一歌は、ギターの準備をする。

チューナーを付けて、音程を合わせて、  
軽い音出しをした。

「素敵な音色…」

「アハハ…ありがとう、鈴菜ちゃん、

じやあ、歌つてみようか

「うんっ！」

一歌がギターを弾きながら、鈴菜と歌い始めるのだった。  
とても、居心地のいい、音色が響き渡るのだつた。

## 第四話 鈴菜の一日

高知県から上京することになった、

鈴菜と鈴菜の父

小さなアパートの一室で、

鈴菜は父と一緒に暮らしていた。

ちなみに、父は会社員で、窓際族である。

父の机は電話が1台、だけしか、置かれていない。

「鈴菜、いつてらっしゃい」

「行つてきます。父さん」

鈴菜は今日も宮益坂女子学園の高等部に登校していた。

1年C組

内田鈴菜のクラス。

桐谷遙や星乃一歌、天馬咲希が、在籍している。

「おはよう、内田さん」

「鈴菜ちゃん、おはよう！」

「おはよう、内田さん」

「みんな、おはよう」

何気ない挨拶を交わすことが出来る友達も、  
この女子校に入学してから、何人かは増えた模様。

「鈴菜ちゃん、よかつたら、歌の練習に付き合つて欲しいな～！」

「わかつた、私でよければ」

「あつ、私もお願ひしてもいいかな？」

「わかつた、でも、自信ないかも？」

「大丈夫！鈴菜ちゃんつて、歌が上手だし！

バツチリ教えられるよ！」

「教えられる自信は無いけど…頑張つてみる」

一歌と咲希のボイストレーニングに、

鈴菜が教えるのだつた。

「じゃあ、発声練習からね」

「おお！なんだか、鈴菜ちゃん、先生になっている！」

「そんなつもり無いけどね…自信ないし」

「でも、鈴菜ちゃんつて、

カラオケでも高得点叩き出しているし、  
何か秘訣とかない？？」

「うーん、楽しく歌うことかな…？」

「誰かのために歌うとか」

「じゃあ…いつちゃんのために歌う！」

「えつ、私のために？」

「うん！私、いつちゃんのために、歌うね！」

「あ、ありがとう…」

鈴菜は咲希に歌い方や発生方法を教えた。

「こ、こういう感じだけど…？」

「すごーい！みるみる、上達していくよ！」

「そうかな…？」

「だつて、ちゃんと歌わないと、

せつかくのライブが悪くなっちゃうから…  
よーし！もつと、歌を頑張るぞー！」

「咲希ちゃんの歌声、キレイだと思う」

「えつ？ホントに？ありがとう！鈴菜ちゃん！

あつ、カラオケ行かない？」

「えつ？ いまから？」

「やりたいの！みんなで、歌の練習がしたいの！」

「わかつた、行こ」

こうして、3人でカラオケへ

「何を歌おうかなー？」

「发声練習も大事だけど、喉の管理も大事だよ？」

「おーー理ある！鈴菜ちゃん！ありがとう！」

「ど、どういたしまして…」

「じゃあ、いっぱい、歌うぞー！」

咲希は何曲か歌い、一歌と鈴菜が、手拍子をして、  
タンバリンを叩きながら、盛り上げた。

「どうだつた？結構、高得点、取れていたよね!?」

「うん、練習が生かせている」

「咲希の歌声、キレイだつたな…天使みたい」

「えへへ～もつと、褒めてもいいんだよ～いつちゃん～！」

「あはは…」

こうして、3人でカラオケを満喫した！

## 第五話 内田鈴菜の生い立ち

内田鈴菜は、ある年の10月16日生まれのO型。高知県の、ある片田舎で生まれた。

幼少時代は現在とは打って変わつて、とても活発な性格で、しょっちゅう外を走り回つては母親の手を焼かせていた。

家が山奥にあつたこともあり、休みの日には家族そろつて、山に出かけて川で泳いだりすることもしばしばあった。

また、自室にクラシックやジャズ、ロックなどの、

さまざまジャンルの音楽をコレクションしていた為か、

鈴菜は音楽を作ることに興味を持ち、自分で作つた曲を母親に、聴かせて褒めてもらうことや、母と一緒に歌を歌うことなどに、転げ回りたいほどの幸福を感じていた。

しかし、そのような幸せな日々は、ある日、母が鈴菜を庇つて、自然災害に巻き込まれてしまい、母を失い、唐突に終わりを迎えることになる。

この事故がテレビやネットのニュースで取り上げられた際に、一部の見ず知らずの人間たちが鈴菜と鈴菜の母親に、

対して心無い言葉を浴びるようになった。

また、母親の死後は歌を歌う目的を失つたことから、

かつてのように、歌うことができなくなつてしまつっていた。

中学生時代には、

母親の遺品である音楽のコレクションを片つ端から聴き漁りながら、

胸のなかに渦巻く言葉にならない訳のわからない想いを吐き出すために、

一心不乱に歌詞や曲、絵などを書き殴つていた。

そしてあるとき、それらの無価値さや醜さを自覚して

「何をやつているんだ、私は価値の無い、女の子の癖に」

というどうしようもない思いのもとにそれらをビリビリに破り捨

てている。

そして、宮益坂女子学園の高等部に進学すると同時に、東京に上京するころには、自分自身がいよいよ無価値な人間に思え、

勉強にも部活にも打ち込まない虚ろな生活を送っていた。

やがて、歌が歌えないことに、恐怖を覚えて逃げ出してしまう。しかし、鈴菜は、一歌やこはね、みのりの歌つている姿を見て、やがて、自分も、もう一度、歌い始めたいと思うようになった。その後、少しずつ歌い始めて、一歌やみのり、こはね達と、仲良くなり、自分の価値観を生み出しつつあつた。

ちなみに、宮益坂女子学園の高等部に進学した理由は、

父の転勤と同時に、高知から東京に行くことになった為である。鈴菜は、今、前を向いて、歌いながら、その人生の道を歩んでいる。たとえ、挫けようが落ち込もうが、関係なかつた。

彼女は、僅かな何かを持つて、生きようと決意したからだ。

天国にいる、母に届けるために、彼女は今日も歌い続ける。

## 第六話 校外学習の班決め

宮益坂女子学園 高等部 1年C組にて：

「わー！ 横浜だつて！」

自由行動、どこに行こうか、悩んじやうな…」

「横浜つていうと、中華街かな？」

他にも、色々、ありそうだね」

「うんうん！ アンマンとかゴマ団子が、食べたいなー！」

あと、みなとみらいの方も、

キレイなんだよねー！」

「みんなで、写真撮りたい」

と、咲希、遥、鈴菜は、

大盛り上がりだつた。

その後、クラス委員の一歌が…

「という訳で、

今から自由に、一組の班を作つてもらいます。

後、今回の遠足では、自由時間は班行動になります。

そのため、各班で行動計画表を立ててください。

その後に、提出してもらいます。

行動計画表は、なるべくホームルームの時間に、作成して、提出してください

「了解しました！ 学級委員長どのー！」

「計画表の用紙やガイドブックは、

前に置いてあるので、そろつた班から、もらつて大丈夫です。

では、今から班を組んでください。

人数は4人か5人で、お願ひします！」

「はーい！」

その後。

「はるかちゃん！ いつちゃん！  
すずなちゃん！ 一緒に班になろう！」

「えつ？」

「私はいいけど…」

「も、もしかして、誘うのが遅かつた!?  
もう、約束している子がいるとか!?

「そ、そんなことないよ。

一緒に行きたいな」

「ホント!? よかつたあ！」

「一緒に楽しもうね、桐谷さん、内田さん」

「うん、私も今から楽しみだな」  
こうして、一歌、遥、咲希、鈴菜で、  
班を組んだ。

「じゃあ、早速、行動計画を立てようか。

私、記入用紙と、ガイドブックを持ってくるよ」

「オッケーー！ いつちゃん！ よろしく！」

その後

「よーし！ 自由行動のコース！  
みんなで、決めていこーつ！」

「おー！」

「えっと、自由時間は12時からで、

16時までの予定を考えればいいんだね」

「4時間あるから、結構あるね」

「ただ、帰りは解散前に集合することになつてているから、  
あんまり予定を入れない方が良いと思う」

「そうだね」

「じゃあ、16時の集合時間に間に合うように、  
少し余裕のある予定にしようか」

「天馬さんや内田さんは、

どこか行きたいところとか、ある?」

「あれ？ 天馬さん？」

「こつちの通りに行つたら、飲茶食べ放題か…  
でも、ゴマ団子1個100円も捨てがたい…」

「咲希つてば、聞いてる？」

「き、聞いてるよ！ 時間いっぱい楽しめる、

コースを考えるから、ドーンと任せてよ～！」

「全然聞いていないじやん…」

「気持ちちはわかるよ？」

ガイドブック、夢中に読んじやうからね

「えへへ、こういうの読んでいると、

色々、気になつて…しかも！

ここのお店のももまん！ 可愛いよね！」

「すつごく、カワイイ！」

「せつかくだから、いろんな食べ物が食べたいね」

「それなら、みなどみらいのエリアは、どう？」

「さんせーい！ オシャレスポットが多いよね！」

「あ、みんな見て、ここで船の見学が出来るみたいだよ？」

「すつごく、豪華だな…」

「デツキから眺め、楽しそう～！」

「ランチどうする？」

「カレーは、どうかな？」

「前に口ケで、行つたことがあるから！」

「じゃあ、ここにしよう！」

「はいっ！」

みんなで、校外学習で何をするか、決めるのだつた！

## 第七話 横浜の校外学習

遠足当日、横浜にて。

「資料館、本がたくさん並んでいて、  
凄かつたね！展示されていた資料も、  
写真付きでわかりやすかつたし！」

「それに、建物自体も、すごく素敵だつたね！」

「なんだか、凄く雰囲気あつたね。」

咲希も、はしゃいでいたし

「え～？そんなに、はしゃいでいないよ～？」

「あっ、海だ」

「本当だ～！見て見て！海だよ！海！  
カモメが飛んでいる！」

「ふふ、今もはしゃいでいるみたいだね」

「でも、開放的になる気持ちもわかるな。  
潮の香りも、すづく爽やかだし」

その後、先生からの指示で、自由行動になつた。

「はーい！」

「咲希さんは、元気だね」

「いつもの事だけどね」

「よーし！みんな！あたし達も出発しよう！」

「予定だと、船の見学からだつたよね？」

「そうそう！デッキからの景色が、いいって話だけど、  
船長室とか、楽しみだな～！」

「そうだね、せつかく、見学が出来るんだから、  
じっくり見て回ろうか」

その後、船のデッキにて：

「へえ、船のデッキって、こんなに広いんだ  
「ガイドブックに書いてある通り、

本当に眺めがいいね。海と街が一望できるし、晴れてるから、結構、遠くまで、見えるな」

「あ、こんなところにタワーがある！」

見晴らしよさそう！

あそこから、向こうにある観覧車の方まで、見えるかな？

昔は、ここで、パーティをセレブの人達が、やつていたみたいだよ？」

「そうかもね。こうやって、潮風浴びながら、気持ちよく、過ごしていたかも？」

あつ、風が強くなつた！」

「鈴菜ちゃん？」

なんとか、鈴菜は立て直した。

「痛たたた…ううん！大丈夫！  
絆創膏を貼れば、問題ない！」

「本当に大丈夫？」

「へ、平氣だから！あつ、そろそろ、お昼の時間！」

「そうだね、前に言つた、

カレー屋さんに行く？」

「アタシも！アタシも！」

実は、お腹が鳴っちゃいそうだよ～！」

「ふふ、それじゃあ、早く行かないとね」

カレー屋さんの前にて：

名前は、スナックサファリ 横浜店だそうだ。

「おーっ！ここが、カレー屋さん！」

遥ちゃん、オススメの！」

「テラス席もあるみたい。

写真で見るより、オシャレな雰囲気だね」

「ふふ、素敵だよね、ちょうど、

お店も空いているし、今なら入れそうだよ」

「もう、お腹ペコペコ！早く入ろうよ！」

来店した。

「メニューは…ビーフカレーに、

チーズカレーや、ハンバーグカレーとかあるよ？」

「どの、カレーにしようかな…？」

「ナンも、あるみたい…」

「チキンカレーもあるんだ…」

「どれにしようかな…？」

みんなで、どれにしようか、迷うのだった…：

## 第八話 昼食後の校外学習

昼食でカレーを食べ終えた後…

赤レンガ倉庫にて…

「わーっ！思つてより、大きい！

こんなに、立派なレンガの倉庫なんだね！」

「外見がオシャレだね。

中のショッピングも、いい感じみたい」

「たかし、1号館と2号館があつたよね？」

「大きい方が、1号館？」

「ううん、小さい方が1号館みたい。

まずは、そつちから、見に行かない？」

「あ、そうだ。

お土産を買いに行きたいけど、いいかな？  
せつかくだし、時間のあるうちに、選びたくて  
私も、先に買いたいな！」

「オッケー！じやあ、早速、お土産屋さんに、  
レッツゴー！」

赤レンガセンター1号館にて…

他校の女子生徒が、桐谷遙を見つけ出し…

「あっ！遙ちゃんだ！」

「ホントだ！桐谷遙ちゃんだ！」

「あっ、桐谷さん、向こうに行つた方が…」  
「ちょっと、待つてて」

「えっ？」

「みんな、よく、私を見つけられたね。

でも、みんな、私のお願ひ聞いてもらえるかな？」

「な、何ですか？」

「私、かくれんぼの途中だから、  
見つかつたら、悲しいから、

みんなには、内緒にしててね？」

「わかりましたっ！」

「あ、握手してください！」

「わかつた、でも、私に会つたことは、

秘密だよ？」

「はいっ！」

と、女子生徒たちが、桐谷遙に握手した。

「桐谷さん、すごい…」

「ごめんね、星乃さん。迷惑かけちゃって…」

そろそろ、天馬さん達と合流しないと！」

「そうだね」

その後、二人は、咲希と鈴菜と合流した。

赤レンガセンターの外にて…

「楽しかった～！」

「いろんな、お店があつて、面白かったね」

「ね！ヨーロッパの雑貨を見て、

気持ちが嬉しいなつて、ハッピーになつちやつた！」

「フレグランスショップも、よかつたね。

並べるだけでも、楽しいし」

「あれつ？ お客様さん、増えていない？」

「えつ？」

「私も薄々、気が付いているけど…」

「もしかして…遥ちゃんを、探しに来たのかな…!?」

「その可能性があるかも…どうしよう…」

「あつ、これ！動画で、桐谷遥ちゃん、他校の女子生徒に、

神対応！って、いいねが、3000も付いてて、

すごい、拡散されている！」

「えええ！3000！すつごーい！」

「感心している場合じゃないけど…」

「やつぱり、早めに出てきて、正解だつたみたい」

「もう、違う所に行つてみようか！」

「あつ、ファンが、寄つてくる！」

「桐谷さん、こつち！」

「あれ、乗ろう！ギリギリ、間に合うと思う！」

「水上バス!?」

「も～！ いつちゃんつてば！」

「私達も乗らないと！」

「はーい！ いつちゃん、待つてね！」

「もーう…」

こうして、急遽、水上バスに乗つた。

## 第九話 水上バスでプロポーズ!?

水上バスにて…

「はあ…はあ…はあ…」

と、一歌は息を切らしていた…

「ごめんね、急に連れて来ちゃって…」

「ううん、助かつたよ。

あんまり、人もいないし、

見つかっていたら、大変なことになつていたね…

それより、ごめんね。

私のせいで、こんな騒ぎになつちやつて…」

「ううん、全然、大丈夫だよ。

咲希も鈴菜も、大丈夫だと思う」

「そうなのかな?」

「あっ、いつちゃん! 遥ちゃん!」

「天馬さん、内田さん」

「これに乗つた後、時間のある限り、

遊ぼうね」

「そうだね!」

「潮風が気持ちいい」

「そうだね! あー、キレイな海!」

「そうだね! 海は、あんまり、見たこと無かつたから…  
ずっと、山奥の田舎に住んでいたから…」

「あっ、そうだつたんだ!」

「うん、上京してきてね、この学校に入学したんだ」

「そうだつたね」

「せつかくだし、写真でも撮る?」

「あたし、いつちゃんと写真撮りたい!  
こつち、こつち!」

「う、うん…」

「あたしに向けて」

「えつ？」

「目を閉じて」

「こ、こう…?」

チュツ

「??」

一歌は、顔面を真っ赤にした。

「いつちゃん、いつも、

あたしと、一緒にいてくれて、ありがとう。  
あたし、いつちゃんと結婚して、  
幸せな家庭を築きたい。

いつか、近い未来~~がんば~~ 結婚してくれると、嬉しいな

「さやさやさやさ、咲希!!？」

「これは、あたしの気持ち

「…もーう！咲希！」

と、一歌は少し怒つた。

そのタイミングで、咲希は一歌にハグをした。  
ギュッと

「いつも、あたしのことを、考えててくれて…」

ホントに、ありがとう…あたし、体を元気にして、  
いつちゃんの、お嫁さんになるね

「女の子同士だよ…?」

「ううん、あたしは、いつちゃんが好き。

それだけ

「う、うん…」

「あわわわわわわ！」

「みんなには、内緒だよ？

しほちやんにも、ほなちゃんにもね！」

「いつちゃんは、あたしの、いつちゃんだからね

「う、うん…」

「いつちゃんは、あたしの、いつちゃんだからね

「う、うん…」

と、一歌は、ビクビクしていた。

水上バス、ゴールにて。

「あーっ！楽しかった～！」

一歌は、顔を終始真っ赤にしていた。  
顔を隠しながら。

「恥ずかしいよ…初めてのキスが、

幼馴染の女の子だなんて…」

それも、咲希と…男の子とキスなんて、  
一度も無かつたのに…！」

「それにしても、天馬さんは星乃さんのこと、

ホントに好きなんだね」

「ふつふーん！婚約相手ですから！」

「えつ？ここここ、婚約、ああああああ、相手  
!?!?!?  
」

一歌は倒れた。

「あーあ、倒れちゃった」

「全部、天馬さんのせいだけど…」

「大丈夫だよ…私は…咲希が好きだから、

これくらい、どうだつてことは、無い…！」

「ホントかな…？」

こうして、校外学習が終わつた。

## 第十話 寧々との出会い

内田鈴菜は星乃一歌と会話をしていた。

「実は歌が上手な友達がいてね、

内田さんにも、出会つた欲しくて…」

「ぜひ、会つてみたい！」

「今日なんだよね、会う日」

「ううん、気にしなくてもいいよ。

今から、会いに行きたい」

「うん、わかつた」

一歌と鈴菜は、寧々のいる場所へとやつて來た。

「この子が、内田鈴菜さん？」

「うん、草薙さんと同じく、

歌を歌つていて、ネットで歌の活動しているみたい

「それは、すごいね」

「あっ、初めまして！内田鈴菜です！」

「初めまして、草薙寧々です…」

三人は、早速、歌の練習をした！

「ふう…内田さん、草薙さん、どうだつたかな…？」

「二人とも、すごく良かつたよ。

前より、どんどん、上達している気がする。

後、内田さんも、上手だつたよ」

「ありがとう」

「星乃さんの歌声は、凛としていて、

キレイな声だなとは、思つていたけど、  
もつと、磨きかかっているような…

きっと、自分の歌を信じられるようになつたと思う  
…」、「ごめん、何か、上から目線で…」

「ううん、そんなことないよ。

むしろ、そう言われると嬉しい。

歌の変化つて、自分じや、あんまり、わからないから…

草薙さんに、言つてもらえると、成長しているなつてことが、実感しているから、ありがとう。草薙さん」

「そ、そつか：」

「二人は、知り合い…？」

「うん、ちょっとしたね」

「そつか、これから、よろしくね。草薙さん」

「う、うん、よ、よろしく…内田さん…」

と、寧々が一歌の背中に隠れる。

「草薙さん!?」

「だつて、初対面の人と、

「こうやつて、会話をするの、初めてだし…」

「草薙さんは、人見知りだからね…」

「なんか、ごめん。グイグイ言つちやつて…」

私も、意外と人見知りな部分があるかもしねない…」

「星乃さん、その…ありがとう。」

歌もだけど、いい刺激になつた…」

「そ、そうなんだ」

「うん。星乃さんと出会つていると、

新鮮さを感じる。普段の生活じや、気付かないことがあるから。

「こうやつて、ワンダーステージ以外で、

歌の練習が出来るのも、とつても嬉しい事だから」

「そつか、それなら、よかつたな」

「えつと、それじやあ、次は三人で歌つてみる?」

「うん!でも、その前に、飲み物買つてこないと!」

「喉乾いたし」

「向こうに、60円から90円で買える自販機があつたよ!」

「ホントだ、安い…」

「ごくたまに、あるね、安い自販機が」

「あ、私も飲みたい」

三人は自販機で、90円のドリンクを買つた。

「とりあえず、飲み物は買えたね」

「隣のコンビニ、

チヨコレートのフェアがやっているみたい」

「たまに、やつて いるよね、チヨコレートのフェア」

「あつ、歌を歌のも良いけど、お菓子作りとか！」

「うーん、でも、私、やつたこと無いし…」

「私も…」

「実を言え ば、私も…」

「みんな、得意じやないみたい…」

三人は、どういう訳か、考え込むのだった。

## 第十一話 手作りプレゼント

歌の練習も良いけど、

たまには、お菓子作りがしたいと、  
どういう訳か、一歌と寧々と鈴菜は、  
思つていた。

「手作りした方が、気持ちが伝わるかも?  
誰に渡すの?」

「うーん、お世話になつてている人や、  
好きな人とか!」

「バレンタインみたい…」

「まだ、9月だけどね…」

「でも、チヨコもだけど、

手作りのお菓子つて、気持ちがこもつていて、  
伝わるかもしれない」

「それも…そうね」

「私も、何か作つてみようかな?」

「うん、それなら、私は…あつ、えむにあげようかな?」

「鳳さん?」

「うん、えむは私の恋人だから…」

「私は咲希と付き合つていて…」

「二人とも、恋人がいたんだ…」

「女の子同士だけね」

「言い出しつぺである、私、

渡す相手がない…」

星乃さんには、天馬さんが、

草薙さんには、鳳さんがいるからな…」

「そんなことは、気にしない方が…」

「う、うん、何か、ごめん、

勝手に話を盛り上がらせちゃつて…」

「ううん、でも、大事なことだと思うよ」

「ありがとう」

「でも、私も、そこまで、お菓子作りは、得意じゃないから、どうしようかと、悩んでいて…」

「何か、いい方法はあるかな…？」

「あ、じゃあ、それなら、お菓子以外とか？」

「お菓子じゃないもの？」

「食べ物じゃなくて、アクセサリーとか？」

「うん、そんな感じ」

「それでも、気持ちは伝えられそう」

「たしかに…その発想は無かつたな…」

「限定しなくてもいいなら、贈れる幅が広がるね」

「うん、そうだよね」

「あ、そうだ、草薙さん、内田さん、

三人で、一緒に作つてみない？」

「え？一緒に…？」

「三人でか…楽しそう」

「うん。ほら、みんなで試行錯誤を繰り返したら、楽しいかなつて。

えつと、二人が良ければだけど」

「うん、やつてみよう」

「あ、うん、いいよ。

わたしも、三人で、一緒に何か作りたい！」

「よかつた…」

「でも、何が良いかな…？」

わたし達で作れそうなものつて、アクセサリーかな…？」

「いいかも、咲希が喜ぶと思う」

「えむも、喜びそう」

「他に何かあるかな…？」

「あつ、穂波なら詳しそうかも」

「え、そうなの？」

「あ…うん。穂波はハンドメイドが得意で、

アクセサリーとか、編み物もしているみたい」「

「すごいね、確かに詳しそう」

「そうだよね。いいアドバイスくれるしあんまり相談してみたいね」

「ちやんといい物を渡したいし」

「そうだね」

一歌は穂波に、メールで連絡した。

「結構、ざつくりした相談だけどな…」

すると、返答が届いた。

(それなら、アロマキャンドルとか、どうかな…？  
初めてでも簡単だし、失敗しにくいよ)

「アロマキャンドル…？」

あのいい香りのするロウソクのことだよね。  
あれって、手作り出来るんだ。

咲希、喜んでくれるといいな」

すると、穂波からのメールが沢山、  
一歌のメールに届いた！

「沢山、アイデイアのメールが届く！すごい…」

「他にも、どんどん、アイデイアを出していくみたい…」

「クラフトとかあるみたい、

だけど、アロマキャンドルの方が、いいかもね」

「うん、それにしよう」

「わたしも」

「私も」

「じゃあ、穂波にメールで伝えるね」

すると

(アロマキャンドルなら、教えられるから、  
もし、よかつたら、

みんなで、今度、一緒に作らない？）

（穂波が教えてくれるみたい）

「星乃さんと内田さん、

わたしも一緒に来てもいいの？

「もちろんだよ！」

「ありがとう」

寧々は、内田鈴菜もだが、望月穂波とも、仲良くしたいと思うのだつた。

こうして、みんなで、アロマキャンドルを、みんなで、作ることになつた！

## 第十一話 鈴菜は奏と出会う

こうして、後日、

星乃一歌と草薙寧々と内田鈴菜は、  
望月穂波の所へと、やつて来るのだった。  
「待ち合わせ場所は、

「ここのはずだけど……まだ、穂波が来ないね……」  
「早く過ぎちゃったからね……」

「うん、そうだね」

（そう言えば、望月さんの他に、  
もう一人来るらしいけど……）

宵崎奏さんって、言つていたけど……）

「お待たせ！内田さん！草薙さん！

「歌ちゃん！」

と、穂波と奏が、やつて來た。

「穂波。それに、奏さんも、

「一人で來たんですね」

「この人は？」

「あっ、宵崎奏さん。

内田さんは会つたことが無かつたね」

「あっ、初めまして！内田鈴菜です！」

「よ、宵崎奏です……こんにちは」

と、互いに挨拶をした。

「立て続けに、知らない人と会話をするなんて……  
思つてなかつたよ」

寧々は、鈴菜と奏と出会い、緊張している様だつた。

「奏さんはね、曲作りをしていてね、

音楽サークルをしているの」

「曲作り……す……いな……」

「うん」

「草薙寧々さんと、内田鈴菜さんは、

二人とも、歌が上手で、

私も、時々、教わつてもらつて いるんです」

「そ うなんだ。星乃さん が教わる位だから、

本当に上手なんだね」

「あ、い、いえ…そんなこと…」

穂波が笑つた。

「穂波? どうかしたの?」

「あ、ごめんね。宵崎さんも、内田さんも、

草薙さんも、三人は、一歌ちゃんの先生だなつて

「そ うだね。草薙さんと内田さんは、歌の先生で、

奏さんは、曲作りの先生だし。

それに、今日は、穂波も先生だね。

アロマキャンドルを教えてくれるし

「ふふ、本当だね」

「あ、そうだ。望月さんも、

今日は、よろしくお願ひします」

「はい、よろしくお願ひします。

あの、草薙さん、もしよかつたら、

同 い年なんだし、タメ口でも、いいですよ?」

「え、あ、うん。その方が、喋りやすいかも…?」

それじゃあ、よろしくね。望月さん

「うん!」

「えつと、今日は、みんなで、アロマキャンドルを作 るんだよね、その…それには、疎くて…」

「あ、わたしも…」

「実は私も…」

「それなら、アロマキャンドルを説明しますね。

といつても、いい香りのする、ロウソクですけど…

大まかに、言つちやえれば…ですけど

「細かく言えば…」

と、寧々が疑問に思つた。

「アロマキャンドルというのは、

ロウの中に、アロマオイルを入れて混ぜてある、  
ロウソクのことです。

火を付けると、ロウが溶けるのと一緒に、

アロマオイルの、いい香りが、周りに広がっていくんですよ」

「アロマオイルって、ラベンダーとか、ヒノキとかの?」

「うん、今回は、エッセンシャルオイルを、

使う予定だけどね。

植物から摘出した、天然のオイルを使うけど…

香りによって、リラックス効果があつて、

集中力を高めるのも、あるみたい」

と、穂波が説明するのだつた。

## 第十二話 アロマオイルを見よう

一歌、寧々、鈴菜、穂波、奏の

5人でアロマキャンドル作りをしようとしていた。  
まずは、材料を買おうとしていた。

「じゃあ…そろそろ…材料を買いに行こうかな…？」

それらしき、店に辿り着いた。

「えつと…」、「かな？」

「わっ、何だか、いい香りがするね！」

「うん、あつ、瓶がたくさん並んでいる！」

「これ、全部アロマオイルなんだ！」

「でも、こんなにたくさんあると、

どれにするか、迷っちゃうよね」

「どういうのを選んだらいいのか、

わからなくなるね」

「ふふっ、それなら、気に入った香りとか、

好きな恋人のイメージに合うのを、選ぶと、

良いと思うよ。

後は、どのアロマに、どんな効果があるのか、  
説明があるから、香りと一緒に確認すると、  
選びやすいかも？」

「なるほど…ありがとう、穂波」

「うん！ それじゃあ、4人共、先にお店を見ててくれる？  
わたし、手芸屋さんで、注文していたのを、  
取りに行ってくるから」

「そうなの？」

「うんっ、だから、4人で、アロマオイルを選んで欲しいな。  
いっぱいあつて、きっと、迷うと思うよ？」

「わかつた。先に私達で、見ておくね」

穂波は手芸屋さんに向かつた。

一歌、寧々、鈴菜、奏とで、

アロマオイルを選ぶのだった。

「改めてみても、たくさん、種類があるね…」

「ローズマリーに、ベルガモット、クラリセージ、ユーカリ、ブレンドオイル、

たくさんあるみたいだね」

「なんか、想像のつかない、香りもあるけど…」

「うん、あつ、これ、嗅いで見る?」

サンプルって、書かれてある」

「あつ、フルーツの香りがする…オレンジ、かな?」

「それ、オレンジスイートって、書かれてあるよ?」

「えつと、オレンジスイートは、甘くすつきりした香りで、

気分を明るくフレッシュする効果があるみたい」

「そうなんだ。あつ、これ、なんだか、咲希を思い出すな…」

「もしかしたら、咲希の、みんなを明るくするところが、似て いるかも?」

「明るく…」

寧々は思つた、大好きな、えむにも、同じことが言えると…

「あ、奏さん、それ、何の香りですか?」

「えつと、ラベンダーだよ。」

甘くていい香りがする」

「ラベンダーだと、こういう、アロマとかに、

よく使われるよね」

「うん。あつ、一番ポピュラーで、

アロマセラピーが生まれるきっかけを作つたって、説明書きに書かれてある」

「そ うなんだね」

「花の優しい香りがして、なんだか、凄く落ち着く」

「ラベンダーは、アロマオイルの中でも、

特に、リラックス効果があるみたい」

「そつか、なら、買つていこうかな…?」

友達にも、リラックスして欲しいし」

「うん、贈る相手のイメージや、

どんな気持ちになつて欲しいかも、考へないと……！」

「じゃあ、もつと、見て回ろうかな？」

こうして、4人で、しばらく、見て回るのだつた。

## 第十四話 アロマオイルの香り

一歌、寧々、鈴菜、奏の4人で、  
アロマオイルを買うことになつっていた。

「草薙さん、これ見て、

クレープフルーツの香りだつて」

「あ、すごい。

スッキリした香りで、目の前に、  
本当に置いてあるみたい」

「奏さん、これ、何の香りだらう……？」

「果物の香りがする……りんご、かな……？」

「あつ、カモミールつて、書いてあります。

りんごみたいに、甘くて優しい香りがします」

「あの……宵崎さん、何か探しっていますか？」

と、鈴菜が問いかける。

「あつ、うん、さつきのラベンダーの香りが良かつたから、  
他にも、落ち着ける香りがあるかな……って」

「落ち着ける香り……それなら、こつちにあつたような……？  
向こうの棚だつたかな……？」

「え、本当？」

「よ、よければ、一緒に見に行きませんか？」

「ありがとう。よろしく、内田さん」

鈴菜と奏は、アロマオイルを探した。

寧々は休憩していた。

「ふう～ちょっと、休憩……」

「思つた以上に、いろんな香りがあつて、  
見ているだけでも、楽しかったね」

「うん、そうだね」

「どれが、いいのか、

「何が良いのか、わからなくなつてきちゃつたな……」

「わたしも……でも、気になつた香りが、

いくつかあつたから、ちょっと休んだら、  
また、行きたいな

「ですね。あれ？」

「あそこには置いてあるのは、アロマキャンドル…かな？」

「あ、本当だ。完成品も売っているんだ。

「様々な色があつて、キレイだね」

「これなんか、キャンドルの中に、花が入っている」

「これは…アジサイかな？」

「色鮮やかで、キレイですね」

と、興味を引いていた。

「こつちは、ひまわりやあさがおが入っているみたい」

「花のキャンドル：結構、あるみたい」

「ホントだ、カワイイ！」

「これを作つたら、えむが、喜びそう」

「ですね、私も、咲希が喜ぶ顔が浮かんできましたよ」

「でも、こんな、難しそうな出来るかな…？」

わたし、手先、不器用だし」

「難しそうだけど…やってみないと、わからないよ！」

「そ、そうですよ！穂波は、教えるの得意だし、

上手ですから！頑張りましょう！」

「うん、そうだよね」

穂波と合流した。

「穂波！注文していた物、受け取れた？」

「うん。待たせちゃって、ごめんね。

みんな、どうだつた？」

「うん、咲希達に、合いそうなのが、あつたけど、

私達、疲れちゃつて、今は休憩中で…」

「そうだつたんだ。

もしかして、嗅ぐとき、瓶に近づきちゃつたのかな…？」

アロマオイルは、匂いが強いから、

離れた距離で、手で仰いで顔の方が良いんだよ？

初めに言つておくべきだつたね、ごめんね…」

「ううん、大丈夫だから、休憩したら、  
樂になつたから、みんなはどう?」

「わたしは、平気かな…?」

寧々と鈴菜も、頷いた。

「よかつた…よければ、もう一度、  
選びに行きませんか?」

わたしも、色々と、アドバイスが出来ると思ひますから」

「そうだね、お願ひ。望月さん」

こうして、みんなで、また、アロマオイルを選ぶことになつた。

## 第十五話 アロマキャンドルを作ろう

宵崎家のキッ chinにて、

一歌、寧々、奏、穂波、鈴菜の5人がいた。

「みんな、いらっしゃい。」

狭いけど、椅子とか、使つてもいいから

「は、はい、ありがとうございます」

「今、お茶淹れるね、えつと…」

この前、買つた、お茶のパック、どこにあるんだろう…」

「あ、大丈夫ですよ。宵崎さん。

わたしがやりますから」

「ううん、今日は、わたしが、淹れたいから。

望月さんも、ゆつくりしてね」

「でも…」

奏がお茶を淹れるが、なかなか、上手くいかなかつた。

「ケトルの水が重たいけど…頑張る！」

「だ、大丈夫ですか…？」

やつぱり、お手伝いさせてください！」

「ごめん…じやあ、お願ひしてもいいかな…？」

その後、5人でお茶を飲んだ。

「ふう…奏さん、穂波。お茶、ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「わたしも…ごちそうさまでした」

「よかつた、ちゃんと、お茶が淹れられて、

望月さんに、手伝つてもらえたからかな…？」

望月さん、ありがとう

「気持ちだけでも、嬉しいです」

「そつか」

そして、本題である、アロマキャンドル作りをすることになつた。  
さて、落ち着いた事だし、

みんなで、そろそろ、アロマキャンドルを作りましょうか

「う、うん…よろしくお願ひします…」

「アロマキャンドルの作り方は、意外と簡単なんだ。

ロウソクを溶かして、オイルを加えて、

もう一回、固めるだけだから

「溶かして、固めるか…」

「そう聞くと、何となく、出来そうだけど…」

「イメージは、出来ないかもしないけど、

順番にやつていったら、イメージが付くから

「わかりました」

「まずは、キャンドルに色を付けるための、

クレヨンを選んでもらおうね」

「クレヨンで色を…？」

「クレヨンを少し削つて、溶かしたロウソクに、

混ぜるんです。それだけで、

ビックリするくらい、キレイに色が付くんですよ。  
選んだ香りに合わせた色にしたり、

層を作つて重ねて、

カラフルにするのも、いいかもせんね」

「層を作る…そういうことも、出来るんだ…」

「もちろん、色を付けずに、形だけ整えることも、

出来ますけど、今回は、せつかくだから、

キレイに、色を付けた方が楽しいかと…」

「そうだね、やってみたいな」

こうして、穂波がアロマキャンドルの作り方の説明をしていった。

「色が決まつたら、次はロウソクを湯煎で溶かします。

とりあえず、最初は、わたしがやってみますね」

穂波がアロマキャンドルの作り方を実践しながら、

説明していくた。

「まず、大きめのボウルを3つ用意して、

このボウルの中に、それぞれのロウソクを、  
淹れて、湯煎していくね』

こうして、穂波が、アロマキャンドルを、  
作つていつて、見本を見せるのだつた。

## 第十六話 アロマオイルを入れよう

「早速、アロマキャンドルを作つてみた！」

「ロウソクを溶かすのに、

ロウソクが必要つて、何だか変な感じ」

「そうだね、でも、チョコレートも、

そういう感じな気がする」

「似ているかも？」

「そうだね」

「言われてみればそうだね」

「ロウソク、溶けてきたね。

あつ、紐みたいのが、出てきた」

「それは、ロウソクの芯ですね。

この芯は、後で使うので、取り出しておいて…

後は、ロウソクが溶けきるまで、

もう少し待つんですね」

それから、数分後…

穂波の合図で、クレヨンを入れることになった。

「うん、そろそろ、いいかな？」

そしたら、さつき選んでくれたクレヨンを入れるんだけど、

ここからは、みんなで、やつていこうか

「わ、わかった。けど、入れるつて、どれくらい？」

「うーん、少ない方かな？」

多く入れ過ぎたら、うまく染み込まなくなるからね。

それと、火が付かなくなるから」

「えつ？」

「あ、大丈夫ですよ！私が隣で見てしますから」

「うん…」

「どの位の量だろう…」

と、鈴菜は少し難しそうな状態だつた。

「望月さんが、一緒にいたら…安心…かな」

と、奏が言う。

慎重に、少しづつ、削ったクレヨンを入れていった。

「ほ、穂波、これ位で、どうかな？」

「そんな、ほんの少しじやなくて、

もう少し入れても、大丈夫だよ」

「なら…」、こうかな？」

「あ、うん！いい感じだよ！一歌ちゃん！」

その口ウをもう少しかき混ぜたら…

ほら、キレイに色が付いているでしょう？」

「ほ、ほんとだ…こんなに、キレイに出来るんだね」

「しっかりと、色が付いている…」

と、鈴菜も見ながら、削ったクレヨンを入れるのだった。  
少しだけ、入れていった。

「これで、ちゃんと、出来ているかな…？」

「あ、宵崎さんも、草薙さんも、内田さんも、  
上手に出来ていますよ」

「あ、ありがとうございます…よかつた」

「じゃあ、次は、少し口ウを冷ましましようか。

あんまり高い温度に、オイルを入れると、

蒸発して、イイ匂いが残らないので」

「そ、うなんだ、それじゃあ、少し休憩？」

「そうだね、でも、そんなに時間はかかるないから、

今のうちに、どのアロマを入れるか、決めておこうね」  
数分後。

「うん、そろそろ、いい温度になつたかな？

それじゃあ、みんな、それぞれ、自分のボウルに、  
選んだアロマを入れてね。

十滴くらいが、丁度いいかな

「わ、わかった。十滴だね」

「ちゃんと計れるかな…思つたよりも、  
オイルが出るかもしない…」

「このオイルも、入れ過ぎると、

火が付かない原因になるから、気を付けてね。  
で、でも、そこまで、慎重に入れなくても、  
大丈夫だから」

それでも、オイルを慎重に入れるのだった。

## 第十七話 完成！アロマキャンドル！

それでも、慎重に、アロマオイルを、

穂波以外の4人が、それぞれ、自分のボウルに入れていった。

「アロマを入れた鍋を、もう一回だけ、

ちよつと、温めて、口ウをかき混ぜて…

そうだ、みんな、形の準備は出来た？』

「うん、出来ているよ。

えつと…この形の真ん中に、口ウソクの芯を入れるんだよね』

「そうそう、芯は、そんな感じで、

わりばしで挟んで、固定すれば大丈夫だよ。

後は、その形に、ボウルの口ウを流し入れてあげて』

「わかった…やつてみる！」

「それじゃあ、これ、はい一歌ちゃんのボウル。

こぼさないように、気を付けてね』

「わかった」

慎重にボウルの口ウに流し込んだ。

そして、いい香りがした。

花の香りがした。とても、いい香りである。色もいい感じに、明るい色になつている。

咲希にプレゼントしようと、一歌は思つた。こぼさないように、ゆっくりと流し込む、

そして、成功するのだつた！

「うふふ、お疲れ様、一歌ちゃん」

「ありがとう。それで、次は何をすればいいの？」

「次はね…特にないよ」

「えつ？」

「後は、口ウが固まるまで、待つだけだから、形に流し込んだら、それで、完成なの。

ね、簡単だつたでしよう？」

「う、うん、もつと色々なことをやって、

難しそうだつたけど、もう、終わりなんだ…」

「こんなに、簡単にできるとは思わなかつた」

「私も…ある意味、ビックリ…」

「ふふ、慣れてきたら、もつと、簡単に作れると思うよ。じやあ、次は湯煎から、自分達でやってみようか。もちろん、分からぬところは、教えるから、

何かあつたら、聞いてね」

咲希にあげる、アロマキャンドルは、完成したな…これで、大好きな咲希に、プレゼント出来る…！」

と、一歌は思つた。

私は、えむの為に作つたけど…このピンクやパステルカラーは、大好きな、えむに似合つている。

喜んでくれそう。

と、寧々は思つた。

鈴菜はといふと、今は亡き母に、プレゼントするようだ。

「あつ、お花でアレンジが出来るから、やつてみませんか？」

「そう言えれば、ドライフラワー、買つていたね」

「はい。ポタニカルキャンドルつて言うんですけど、これも、そんなに、難しくないので、安心してくださいね。

まず、さつきみたいに、アロマキャンドルを完成させたら、それを一回り大きな型に入れるんです。そうしたら、キャンドルの形の間に、隙間が出来るから、そこに、好きなお花を、少しづつ入れて、また上から口ウを流し込んで…それで、完成です。

後は、固まるのを待つだけです」

こうして、  
ポタニカルキヤンドルを、  
実践して、  
作るのであつた。